

Dating the Acquisition of Gōkan by the Daisō Lending Library During the Bunka, Bunsei, and Tenpō Periods on the Basis on Refitted Protective Covers

McGEE Dylan

This paper will examine over 34 different varieties of protective covers used by the Daisō lending library throughout the nineteenth century, categorizing them according to pattern. When cross-referenced with the publication dates of the book on which they appear, these covers yield a consistent data set for dating the acquisition of individual books—something that has not been possible previously due to the absence of detailed house records.

The Daisō lending library operated for nearly 150 years in castle town of Nagoya and at its height was regarded as the largest commercial lender in all of Japan. While there has been extensive research on the history of the firm, as well as a full bibliographic survey of its extant books, to date very little is known about its day-to-day operations, given the dearth of house records about its acquisition and lending practices. Accordingly, this paper will seek to model a new approach for dating the acquisition of Daisō books, based on a cross-referencing of cover varieties with publication data.

The practice of fitting heavily circulating *gōkan* with protective covers appears to have begun at the Daisō around Bunka 8 (1811), when the first proprietor, Ōnoya Sōhachi I (Tojirō) passed away and was succeeded by his son Seijirō. This practice continued for at least fifty years, with evidence of newly fitted covers dating to Bunkyū 1 (1861) and later. The covers themselves appear to have been intended to minimize wear and tear on the

lavishly illustrated *gōkan*, whose brilliant *nishiki-e* covers were an object of interest for lending library readers. The covers featured a different design each year, beginning with relatively simple brushstroke designs in the 1810s and 1820s, and progressively moving to more complex abstract (stripes, lattices, and swastikas) and figural patterns (seashells, animals, etc.).

This paper proposes that the Daisō alternated varieties of protective covers from year to year and fitted them on books that circulated heavily soon after acquisition. By cross-referencing the annual varieties of covers with the publication dates of the books on which they appear, it is possible to estimate the year of acquisition. At the same time, this material enables us to create windows for estimating the production of manuscript books and paratextual materials like ads for Daisō brand medicines and cosmetics.

貸本屋大惣の改装表紙から見る文化・文政・天保期間の合巻の仕入れ

マギー・ディラン
McGEE Dylan

はじめに

本論文では、旧大惣本の改装本に着目し、表紙が改装された合巻の約七〇〇点の具体例を基に文様の種類と制作年によって図表化したデータを検討する。また、このデータを踏まえて大惣合巻の仕入れ実態の一端を明かしつつ、大惣本及び一部の大惣資料の年代推定には、改装表紙は如何なる書誌学的価値を持つのかについて一考察を試みる。

① 貸本屋大惣の背景・先行研究

大野屋惣八（通称大惣）は明和四年（一九七七）から明治三二年（一八九九）にかけて約一三〇年間以上名古屋の長島町五丁目を本拠地として営業する貸本屋である。同じ名古屋城下の書物市場において永楽屋東四郎、風月堂孫助、松屋善兵衛など、数多くの出版書肆、古本屋、貸本屋が集まる中で、大惣の龐大かつ独特な蔵書が店の売りとなった。儒教と仏教の古典籍、史書、医学書、絵本図解、草双紙、評判記、献立書まで多岐にわたり、近世学問と諸般の知識を広く包括する、大規模な文庫であった。他の貸本屋と違って得意先廻りをせず、「家の掟として買ふことあるも決して売らぬ」という、慣習にとられない規則を守る為、年々に部数が増加し、果たして閉業時に至ってはその蔵書が土蔵三種分を満たし、二一四〇一冊（一六七三四部数）に及んだ。その中、草双紙の部数が七

二九七部となり、蔵書の約四三・六%を占めた。特に合巻の数が多く、『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目録』によれば、閉店時に種本を含めて六千部近く所蔵していた。^①

合巻のような大衆文学を始め、大惣本の魅力は様々な読者層に広まった。大惣の営業期間中、尾張藩の人口増加と天保改革の影響で寺子屋の数が劇的に増大した結果として、読者も何倍にも増えたと思われる。また旧大惣本の見返しにおいては大惣銘柄の薬品や化粧品引き札が散見することから、文化文政期から女性読者が多くなったと推定される。文化初期から曲亭馬琴、十返舎一九、式亭三馬のような江戸文豪が相次いで訪問する頃より、大惣の知名度が更に高くなり、東海地方より広い地域で日本随一の貸本屋として謳われ始めた。

貸本屋大惣の営業史とその旧蔵書についての研究は三十年ほど前に全盛を極めた時期があり、売却用に作成された早稲田大学所蔵の「大野屋惣兵衛蔵書目録」を基に、全国各地に四散した大惣旧蔵書を目録化した、柴田光彦『大惣蔵書目録と研究…貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目録』（昭和五八年）は重要な基礎文献となる。水谷不倒の『古書の研究』（昭和九年）は早くから大惣本の売却の経緯を考察しており、その後の先行研究としては、広庭基介「京都大学大惣本の購入事情」（『大学図書館研究』二十四号、昭和五七年）と西澤敏明「名古屋市鶴舞図書館所蔵の大惣本について」（『郷土文化』六十二巻一号、平成十九年）などがある。大惣の営業史については、大惣主人の子孫である江口元三（『貸本屋大惣の今昔』『郷土文化』八巻一～二号、昭和二八年、「我が家の歴史」の原稿、昭和五七年刊）などを始めとして、安藤直太郎『貸本屋大惣の研究』（昭和四八年）、朝倉治彦『貸本屋大惣』（昭和五一年）、長友千代治『近世貸本屋の研究』（昭和五七年）、『近世の読書』（昭和六二年）、及び「貸本文化」増刊号へ特集・貸本屋大惣（昭和五七年）がその主な先行研究となる。なお、英語圏では、上記の先行研究を踏まえてマーカーズ（『The Daiso Lending Library of Nagoya, 1767-1899, Gest Library Journal, Vol. 3, No.1 (1989)』）の

キー（『The Publisher's Go-Between Kashihon-ya in the Meiji Period, Modern Asian Studies, Vol. 14, No.2 (1980)』の論文も詳しい。付け加えて、日本語で拙稿の「平出順益の『代睡漫抄』から窺える大惣本の貸出と享受」(2015)、「大惣本の落書」(2013)など、英語で（『An Examination of Daisō Book Refurbishment Practices』(2016)）と（『Nagoya Gesaku and the Daisō Lending Library』(2017)）の論文もある。

② 大惣の蔵書目録、営業文書

以上、貸本屋大惣の営業史とその旧蔵書についての先行研究となる。次に江口家によって遺された文献を上げれば、近世後期に正稿した蔵書目録二部と記録類、書簡など様々な資料が遺る。長友千代治（一九八二）の一覽表に従って整理すると、重要な大惣資料は次のようになる。

- ① 旧大惣本
- ② 『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目』(明治三十二年成稿)
- ③ 『胡月堂蔵書目』(嘉永五年成稿)
- ④ 『古今蔵書目録(残本ノ部)』(大正六年成稿)
- ⑤ その他の記録類 大惣家屋図、過去帳(二冊)、係図(四部)、年代表(一部)、「我が家の歴史」(一部)、江口元三のノート(八冊)、スラップ帳(二冊)、大正・昭和期の書簡
- ⑥ 印記(三十一顆)
- ⑦ 江口家の墓石(名古屋千種区・法応寺)

中で大惣の蔵書構成を検討するに②の『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目録』と③の『胡月堂蔵書目』が最も有力な材料となる。『胡月堂蔵書目』は『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目』の完成より四七年ほど前に遡って、嘉永五年（一八五二）に尾張藩士の細野要齋（一八一〜一八七八）によって作成した目録である。前者と比較して大きな違いというのは、まず書物の体裁（大本、中本、小本など）を問わずに部類することと、部類項目はそれほど細分化していないことである。全体的内容に関しては、合計三三六九点の蔵書が大きく十二項目に部類され、さらに故実、有識、農業などのもっと細かい小項目一四七点に分かれる体型を取る。ただし、第一巻しか現存しないものとして、それに地理、宝貨、技芸、佛書、兒弄鄙事に属する蔵書は全て記入漏れになっていることから、『胡月堂蔵書目』は不完全なし未完成の資料として取り扱うことになる。もう一つの蔵書目録との比較対照を踏まえて一部の蔵書が一八五二年と一八九九年の間にどれほど増加し、多様化したかの推定が可能になりうる。ただし、文学史面においては惜しくも当時の大衆文学（兒弄鄙事に属する戯作など）の蔵書構成を明かす記録がないので、合巻を含めて草双紙については不明のままである。

それに対して閉業時に蔵書の売却用に作成された『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目』では七千部以上に及ぶ草双紙の蔵書が細かく体裁とジャンルによって部類されるので、もっと有力な材料となる。その大半数を占めた合巻の場合、体型面において一冊ものの草双紙、判紙形草双紙、中形草双紙という三つの項目に分け、それぞれの項目を示すイロハ記号を三種類（ぬ、の、る）用いる。因に多くの現存本では、未だに函架番号に冠して「ぬ」「の」「る」を記した紙片が見られる。

以上の根本史料を基に家族の歴史や閉店前後の営業と蔵書売却実態が明らかになるが、近世中期・後期を通じての日常的営業実態の詳しいところまで迫ることは決して容易ではあるまい。何故ならば当時の営業文書が殆ど遺さ

れていないからである。通常、貸本屋では貸出台帳や見料帳の形で簿記をつけることが一般慣行となっていたが、大惣の場合は惜しくもこの類いの資料が形として遺されていない。店主の子孫、江口元三が昭和初期に著したノート（小田原私立図書館蔵）によると、一時期に見料帳があったことが明らかになるが、未だに本資料が発見されず、現時点ではその有無を確認できない現状である。

③ 大惣本のパラテキスト

そこで、本研究では近世中期・後期における、大惣の蔵書仕入れ、仕立て、貸出、貯蔵、修復などを巡る営業慣行の再構築を目指して、旧大惣本そのものに残る資料を調査する現状である。いづれもパラテキストと呼ぶべき資料として、以下の八種類になる。

- ① 大惣本の題簽
- ② 表紙の紙片（請求番号、イロハ、干支記事などが記入した資料）
- ③ 印記（種類と蔵書における位置についての詳細データ）
- ④ 大惣の改装表紙
- ⑤ 売掛帳の反故（裏表紙の芯紙として残る）
- ⑥ 店主惣八による遊紙の書き込み
- ⑦ 読者による書き込み、落書
- ⑧ 大惣銘柄の薬品や化粧品品の広告

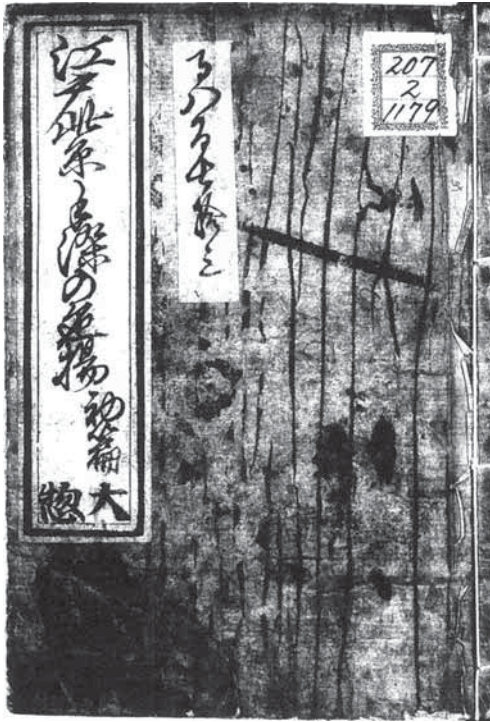
中で③の印記と⑧の薬品広告は朝倉、柴田、長友などの先行研究で取り上げられ、また⑦の読者による落書については長友千代治の「東京大学の『大惣本について』(昭和五七)」とミギーの「大惣本の落書」(二〇一三)がある。これまでの研究では取り上げられていない資料は①、②、④、⑤、⑥となるが、本論文では紙幅の関係で④の大惣の改装表紙のみに諸点を当て、その書誌学的価値について一考察を試みる。

④ 大惣合巻の改装本を巡る諸問題点

『貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目録』を参考にして大野屋惣八は文化四年(一八〇七)から明治三年(一八七〇)にかけて千三百五十七作の合巻を仕入れたと推定される。種本を含めてその部数が六千部近くに及び、全体的に蔵書の二十二・四%を占めるほど大きなコレクションとなった。弘化二年(一八四五)に見料を定めて以来、合巻は十日間、十冊単位で約六〇八分に設定したが、その前からも比較的に廉価な見料で貸し出すものだったと思われる。部数が多くて流通が活気だった商品としては特別な管理が必要となった。そこで一旦仕入れた合巻を複数冊合綴し、内部の表紙に新しい外部の表紙を仕立てた上、大惣自作の題簽と函架番号の紙片を貼った(図①参照)。現存する改装本の物質的諸相を基にして仕立ての順序は次のように行ったように見られる。

合綴 ▼ 表紙の改装 ▼ 題簽と函架番号の貼着 ▼ 所蔵印を押印

草双紙の様々な部類の中で、合巻だけがこのように改装したのである。それと相対して見料が十冊単位で五分ほどだった黄表紙と比べると、とても管理が手抜きで、たいてい函架番号や所蔵印の印記すらないままで流布された。



図① 式亭小三馬作『江戸紫系と染の巻揚』(天保八年刊)の改装本。左上に大惣自作の題籤、左中に函架番号(る八百七十三)の紙片がある。木目模様の表紙は同じ天保八年(一八三七)に刊行した大惣合巻に見られる。国立国会図書館所蔵

その現存本では貸本としての変装を明かす特徴は殆ど見られない状態となる。概して大惣の青本、黒本も同様である。一方、高額で巻数が多い江戸読本に関しては、蔵書管理を徹底して小忠実に見返しに沢山の丸に囲まれた数字の印記を押し、小口に題名、種本の部数を示すための赤い縦縞を書かれた。これは全編の揃いを確認するための業務と思われる。要するに合巻は同じ草双紙の中でも特別に丁寧な管理を受け、また同じ長編小説である江戸読本と比しても表紙改装を始め、独特な方式で仕立てられた。

これまで旧大惣本の合巻を調査する過程で総合的に七八三部の改装本のデータを集め、外部表紙を五十一種類特定した。大きさは通常、美濃紙半裁二つ折りの中本を三方折り込みに覆うぐらいの寸法となっており、そして裏張りに反故紙または漉き返した紙料を用いることから内部の表紙より二〜三倍ほど分厚く仕立てられている。表紙の文様は多岐に渡り、柿洪をさっと塗ったような刷毛目を始め、縞模様、格子模様、卍繋等の象徴的文様から貝類、手鞠、動物等の形象的装飾まで施されている。他の貸本屋で流通した合巻と比較対照して特に絵柄が付いている表紙は大惣合巻ならではの独特の材料といえよう。

合巻の煌びやかな錦絵摺付表紙を保護するために仕立てられたように見えるが、本を飾るため、大惣本として特定するためにも機能した可能性がある。また、書物がぎっしり詰まっている土蔵においては収納・保管の便宜としても役に立ったことも考えられる。ただし、必ずしも全部の大惣合巻が改装本になっているわけではない。現時点で調査した千四百二十六部の旧大惣本の合巻の中で、合綴本が多いものの、たった七八三部が改装本となる。大惣蔵書の売却後、所蔵図書館によって再びの改装に際して外部の表紙を取り外されたものもあつただろうが、元々大惣によって改装されていないように見るものもある。果たしてどんな基準によって改装対象の作品を選抜したのかは、不明である。体裁、刊行年、内容、作家、版元などの共通点が浮き彫りにならない。

また、表紙の制作については不明なことが多い。誰に、どこで作られたのかを明かす記録は一切残っていないので、表具師などの職人が作ったものか、それとも大惣で働く丁稚、それとも文化・文政期に大惣の筆耕作者として働いていた樹芽田楽（生没年不詳）、高力種信（一七六五〜一八三二）、天保期に書物修復の作業を行っていた小寺玉晃（一八〇〇〜一八七八）の創作なのか分からない。もしも店内で制作したものだとするれば、その紙料は初代大野屋惣八の兄、岐阜で美濃紙を売買する吉兵衛さんから購入した紙なのか、それとも他の店の商品だったのか。

一応、旧大惣本の遊紙にある惣八の記事および表紙、裏表紙の芯紙として貼り込まれた売掛帳の反故から集まったデータを見ると、惜しくも表紙に関してはヒントを得ることできない。

⑤ 改装表紙と合巻の仕入れ

大惣の創業者、初代大野屋惣八（富次郎）が没し、二代惣八（清次郎）が店主になる文化八年（一八一二）頃から蔵書の仕入れ、仕立て、整理、貯蔵などに関してはあらゆる変化が見えてくる。例えば、嘗て表紙に貼っていた二センチ平方ほどのイロハ記事の紙片が見られなくなり、函架番号はイロハ一文字と番号だけで組み合わせて、干支記事を使わなくなる。またほぼ同じ頃に合巻が爛熟期に入り、大惣が仕入れる部数が増えるのみならず、山東京山著の『庚申待女房献立』（一八一三年刊）、『花競化粧桜』（一八一四年刊）のような作品を三部ずつ仕入れて、蔵書購入に対して積極的な態度を取る。

合巻の蔵書が増えつつある中で改装表紙の変化も見えてくる。概して、大惣合巻の改装表紙の変遷は三つの期間に分けられる。文化五年（一八〇八）から文化十二年（一八一五）にかけては、大惣の改装本は通常、複数の作品を合綴したものととして外部の表紙は単色（青か柿渋）をさっと塗っただけの地味な材料となる（**図②参照**）。それより次第にデザイン性の様子が加わり、縞模様、卍繫、花柄、十二生肖を符牒するものが見られる（**図③**、**⑤参照**）。文化十三年（一八一六）から天保十四年（一八四三）にかけて二八年間の間、絵柄が異なる二八種類の外部表紙が年ごとに変わる傾向が見られる。最後に弘化元年（一八四四）から明治三年（一八七〇）までの二十六年間の間では八種類の表紙しか見られなくなり、年ごとに変わる傾向も見られない。

大惣合巻の仕入れを推定するに、第二期の表紙は毎年デザインが変わるため、最も有力な材料となる。この段

階で文化十三年から天保十四年にかけて刊行した大惣合巻を千一三七部調査し、改装本に絞れば六八七部となる。このサンプルをもつて刊行年別で部類すると、刊行年と表紙種類の相応性が著しい。全体的に約七四%の大惣合巻の改装本は刊行年も表紙種類も合致している。ただ、このデータが相応性を示すだけで、強ち仕入れの年度を明かすわけではない。

図② 曲亭馬琴作『親為孝太郎次第』（文化七年刊）の改装本。

国立国会図書館所蔵



図③ 柳亭種彦作『高野山万年草紙』（文化十四年刊）の改装本。

国立国会図書館所蔵





図④ 市川団十郎作『伊達姿辰巳八景』（文化十一年刊）の改装本。国立国会図書館所蔵



図⑤ 墨川亭雪麿作『犬神太郎暴悪譚』（天保十三年刊）の改装本。国立国会図書館所蔵

そこで二点の改装本を具体例として取り上げ、刊行年・表紙種類と仕入れ年度の関連性について検討する。二点とも兎の形象で飾ったものであるが、兎の大きさが異なり、明らかに別種の表紙となる。図⑥の方は天保二年（一八三一）刊の恋川行町著の『一之谷青葉後記』となるが、他に同じ刊行年で同じ表紙を持つ改装本は十七部ある。また図⑦の方には天保十四年（一八四三）刊の式亭小三馬著の『娘曆振袖始』となるが、他に類する改装本は二十部ある。干支で言えば、天保二年と天保十四年は卯の年にあたる。管見では、両作品の刊行年（卯の年）と改装表紙の模様（兎）の関わりから本書物は刊行より一年以内に仕入れて、改装を仕立てられたと推定する。干支を符牒しなくてももう二十六種の表紙をもつ改装本の刊行年と表紙種類の相応性に鑑みては、恐らく仕入れ・仕立ての経緯も同様である。

結び

以上、大惣合巻の改装本の物質的諸相と仕入れ実態について考察した。大野屋惣八は文化四年（一八〇七）から明治三年（一八七〇）にかけて千三百五十七作の合巻（種本を含めて六千部近く）仕入れたことから分かるように、合巻というのは長年、欠かせない文学商品となり、名古屋の読者の中で人気を博したため、大惣銘柄の薬品や化粧品に掲載媒体ともなった。かなりの読み疲れが出るまで流通されたものの、概して内部表紙の保存状態がまだ比較的に良いということは、改装表紙の効果を反映する。

表紙の変遷は三つの期間に分けられる。文化五年から文化十二年にかけて、大惣の改装本は通常、複数の作品を合綴したものととして外部の表紙は単色（青）をさっと塗っただけの地味な材料となる。



図⑥ 恋川行町作『一之谷青葉後記』（天保二年刊）の改装本。
 国立国会図書館所蔵



図⑦ 式亭小三馬作『娘暦振袖始』（天保十四年刊）の改装本。
 国立国会図書館所蔵

それより展開して文化十三年から天保十四年にかけては、外部表紙は年ごとに変わる傾向が見られ、模様次第に華やかになり、冪繫、花柄、十二生肖を符牒するものも見られる。この二八年間の間だけ、表紙の種類によって蔵書の仕入れと改装の年度推定が可能になる。また弘化元年（一八四四）から明治三年（一八七〇）までの二六年間の間では八種類の表紙しか見られなく、年ごとに変わる傾向が見られなくて、仕入れについての推定が成り立たない。

今後の研究では、調査データの収集が終わり次第に大惣合巻の改装本を近世後期・幕末の行政変化に基づいて受けた影響を改めて検討する必要がある。特に天保改革直後の自肅期を経て合巻の変遷、長編化が大惣の改装慣行にどのように影響をしたのかについて考察しなければならない。そして今後はその研究成果を踏まえて大惣のみならず、名古屋という文学市場をより広い視野に入れて、江戸における文学が名古屋に来るまでの流通のスピードなどがより明らかになることを検証していきたい。

【注】

① 大惣による部数の計算方式について注意が必要である。蔵書目録で「一冊もの」と示す作品は通常、一部として数えられるが、二編揃いのものは二部として、三編揃いのものは三部とされる。また「草双紙続物」などに部類する長編化した合巻の場合は、十数部として数えることもある。極端な具体例をあげると、『修紫田舎源氏』だけで一〇九部になっていた。何故なら三十八編までに及ぶこの作品を五部所蔵していたからである。本論文では、大惣蔵書目録での方式に従って部数を示す。

* 討論要旨

勝又基氏は、改装した合巻の点数が天保の改革を境に減少している理由について質問した。発表者は、これは未だ検討を要する問題であるとしながらも、弘化元年頃、天保の改革の影響を受けて一時的に合巻の生産が落ち込み、数年後に回復したと言われているため、その影響であると考えられる、と回答した。勝又氏は、実際には改革の後、数年経っても点数がそれほど伸びていないことから、主力商品であった合巻の点数に改革が致命的な影響を与えたとすれば、

それは興味深い問題であると述べて、調査データの意義を示唆した。

木越俊介氏は、毎年表紙のデザインが変わる文化十三年から天保十四年までの間に、デザインの重複などがあれば、表紙に加工される前の紙の状態や表紙の制作過程を知る手がかりになるのではないかと指摘した。発表者は、改装表紙の制作について現在までに分かっていることとして、仕入れてからしばらくは加工していない状態で流通したが、一年以内にはまとめて改装が行われたというのが定説になっている、と説明した。